



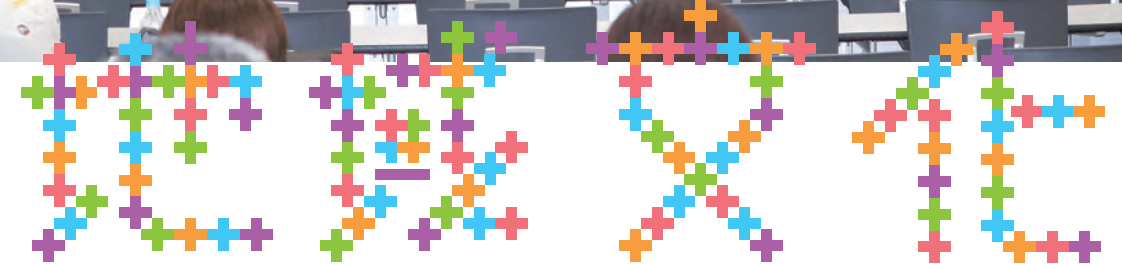
2023年度キックオフシンポジウム

記録をどう「つくる」「つたえる」「つかう」か —文化施設におけるアーカイブのあり方を考える—

地域文化の土台を積み上げる、
生きたアーカイブを目指して

2023年度のプラス・ミュージアム・プログラムでは、
さまざまな問題にミュージアムをプラスしていくことの
可能性を、より具体的な問題に的を絞り、
個々のケースに寄り添うことで、探っていきます。
キックオフ・シンポジウムでは、
文化施設における「記録」について考えていきます。

アーカイブをどう「つくり」、どう「つたえ」、どう「つかう」ことが、
地域社会に価値をもたらすのか。
記録の「余白」や「暗黙知」、「当事者性」と「身体感覚」、
「体験」・「対話」・「省察」などを切り口に、
地域創造の「おんかつ」事業、せんだいメディアテークの「わすれん！」など
具体的な事例をもとに、文化施設における「記録」のあり方を考えます。



日時／ 2023年7月30日(日)13:00～17:00

会場／ 北海道大学文系講義棟6番教室
※Zoomを用いたオンライン配信を併用

パネリスト／ 佐藤良子(静岡文化芸術大学 准教授)
甲斐賢治(せんだいメディアテーク アーティスティック・ディレクター)
岩崎久美子(放送大学 教授)

司会・コーディネーター／ 佐々木亨(北海道大学文学研究院 特任教授)
卓彦伶(北海道大学文学研究院 特任准教授)

参加者のべ99名(オンライン配信、事後配信視聴者を含む)





「経験」・「対話」・「省察」を生み出すアーカイブ

佐々木 亨 (北海道大学文学研究院 特任教授)



「プラス・ミュージアム・プログラム」は、2022～2024年度の3カ年で計画している事業であるが、その最終年度には「事業成果のアーカイブ化」を掲げている。ケーススタディや活動におけるプロセスと成果を整理して、情報資源として発信、共有化する計画である。そのため、文化施設におけるアーカイブとしてこれまでの実績と蓄積がある地域創造の「おんかつ」と、東日本大震災以降に誕生したせんだいメディアテークの「わすれん！」を事例として、そのコンテンツ、仕組み、活用状況を報告していただいた。その上で、成人学習論の視点から両事業の意義と価値を議論した。

一人目のパネリストである佐藤良子氏からは、一般財団法人 地域創造が毎年開催している「公共ホール音楽活性化事業」（通称：おんかつ）を事例に、公共文化施設の事業の記録において何を伝えるべきかをお話いただいた。佐藤氏は以前、この事業のコーディネーターであった。この事業では、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設での地域交流プログラムとして、ミニコンサートや参加体験型のワークショップなどを実施する。

また地域のホールで有料のクラシックコンサートを開催する。これらの事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援することが目的である。1998年より事業が始まり、これまでの実施団体はのべ400団体を超えている。

活動報告書は毎年発行され、実施団体によるアクティビティおよびコンサートの報告に加え、ホール担当者の意見・評価、各団体に派遣されたコーディネーターやアシスタントのレポートが掲載されている。その活用事例として、たとえば5年分の報告書(2013～2017年度)の「ホール担当者の意見・評価」項目の回答をもとに、記述された文章のテキストマイニングを行い、個々の記述を客観的・俯瞰的に捉えることで、今後のコーディネーター、アシスタントによる指導や助言に活かしている。

一方で佐藤氏は、「舞台上で繰り広げられる演劇やダンスやパフォーマンスは、それ自体を保存することができないという意味でドーナツホールであり、舞台芸術アーカイブは、不在の中心を囲む周辺の資料からなるドーナツであるという考え方」（岡室2023）を紹介した。その上で、ドーナツホールの部分を記録する重要性について、「専門職員が不在な上、劇場は図書館・博物館・文書館などのような、資料

を保存・整理する機関とも機能が異なるため、劇場で行われる公演について記録を残すべきという意識も薄くなりがち」（山本・生田2023）という課題を指摘した。

二人目のパネリストの甲斐賢治氏は、2001年に開館した仙台市の生涯学習施設である、せんだいメディアテーク（smt）の「3がつ11にちをわすれないためにセンター」（通称：わすれん！）にまつわる考察」と題した報告をした。2011年3月の東日本大震災直後のこととして、震災から1～2ヶ月で、メディアテークが位置する仙台市中心部は、震災前の日常とほぼ変わらないように見えた。しかし、車で30分ほど沿岸部に走ると、津波の被害を大きくうけた景色が現れた。被害の大小、家族や財産を失った人とそうでない人、放射能の汚染エリアの内と外、東北と首都圏、東日本と西日本。震災以降いろいろなところに〈隔たり〉が生じていた。これらの〈隔たり〉によって、他者との距離が生じると、語れなくなり、自閉していこう。その〈隔たり〉を行き来する回路をつくるのが、生涯学習施設の活動テーマになるのではないかと考えから「わすれん！」が誕生した。市民、専門家、スタッフが協働し、震災の復旧・復興のプロセスを独自に記録、発信する。映像・写真・音声・テキストなどさまざまなメディアの活用を通じ、情報共有、復興推進に努めるとともに「震災の記録・市民協働アーカイブ」として蓄積・公開していった。その特徴は、参加者に対する指示などは基本的に一切出さない、参加者となる人の募集であり記録写真などモノの収集ではない、参加者は記録活動に限定せず記録活動の補助や資料利活用への参画も可能、スタッフは、参加者間の交流が図られるよう促す仕組み、機会づくりに努める、事業全体が「『隔たり』を行き来する回路」となる学習機会と捉える、などである。「わすれん！」の経験を経て得たこととして、甲斐氏は

＜アートと歴史＞＜記録する資格＞＜獲得されていく当事者性＞＜歴史はだれのものか＞の4つの視点から語った。その1つ＜獲得されていく当事者性＞では、当事者性の獲得を目的にしない／できないが、結果としての「学び」を続けることで、当事者性が少しずつ近づき、ともに過ごすことで育まれていくという経験を語った。

最後のパネリストである岩崎久美子氏は、成人学習論の視点から、「おんかつ」と「わすれん！」における記録と記憶をどのように評価するかというテーマで考察した。はじめに、(1)地域に根ざしたインフォーマルな学習の場として、両事業の実践を成人学習活動の場として捉え直した。その上で、(2)成人学習の構成要素である「経験」・「対話」・「省察」から、両事業の成人学習としての意義を確認した。たとえば、「経験」では、学習とは経験の変容を通じて知識が生み出されるプロセスであるとする「コルプのサイクル」の一部に両事業があてはまると説明した。「省察」では、参加型の問題発見、解決に向けた提案を考える方法である「フォトボイス」の考え方が、両事業に類似している。つまり、自分たちの生活を自分たちの視点で記録し考え、自分たちの状況・環境について知識を高め、それによって当事者性を獲得していたとした。最後に(3)両事業に対する適切な評価として、数値化されない人間的な評価が相応しいと論じた。

休憩後のディスカッションでは、両事業に共通する当事者性の問題、マクルーハンのメディア論におけるcoolなメディアでの余白・マージンのあり方、身体感覚・感情などの記録について、会場参加者とZoom参加者とともに議論した。